



Data 2023-21

監督・脚本: デイミアン・チャゼル
 出演: ブラッド・ピット/マーゴット・ロビー/ディエゴ・カルバハ/ジン・スマート/ジョヴァン・アデポ/リー・ジュン・リー/P・J・バーン/ルーカス・ハース/オリヴィア・ハミルトン/トビー・マクワイア/マックス・ミンゲラ/ローリー・スコウヴェル/キャサリン・ウオーターズ
 トン/フリー

👁️👁️ みどころ

なぜ、1920年代に、あの場所に“映画の都”ハリウッドができたの？その“歓楽の都”ぶりは？本作では、そんなハリウッドに生きる3人の主人公と2人の準主役の人生模様注目！

乱痴気パーティーから始まる導入部は、“これぞバビロン！”だが、そもそもバビロンとは？そして、バビロンとハリウッドの異同とは？そんな歴史の勉強も面白いが、本作ではそれ以上に人間模様のあれこれを189分間たっぷり楽しみかつ学びたい。

サイレント映画からトーキーへの変化。これはアナログからデジタル以上の激変だったから、その対応は？そんな劇的変化の中に見る、中年男の悪あがきは？新進女優と若き野心家の転身は？本作ではそれを中心に、三者三様の主人公の人生の選択に注目！しかして、その明暗は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「バビロン」とは？あなたはそこから何を連想？ ■□■

今や“ハリウッド”は、“映画の都”として世界的に有名。日本にも京都の大秦撮影所や松竹の大船撮影所等があったが、それを知っているのは一部の日本人だけだ。しかし、映画スターの豪邸が立ち並ぶ高級住宅街であるハリウッドができたのは、一体いつ？そして、なぜあの場所に？それは、もちろん映画の歴史が始まった後だが、その経緯は興味深い。「1926年ベルエアー」という字幕からはじまる本作で明らかのように、1926年当時のハリウッド周辺は、ぶどう畑以外何もない荒野で、道路も未舗装だった。

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（19年）（『シネマ45』137頁）は、ハリウッドの映画スターを描いた映画として有名だが、本作の「バビロン」って一体ナニ？あなたは「バビロン」から何を連想？それには、映画の歴史の勉強が必要だ。

そして、その教材としては、『映画検定公式テキストブック』（キネマ旬報社・06年）が最適だ。同書「第2章 映画の歴史・外国映画編」は、「ハリウッドで映画製作がはじまる」「アメリカ映画の新しい時代の幕開け」「アメリカ映画の父グリフィス」「産業としての映画が確立」「スター誕生」等の小見出しで、詳しく解説しているの、これは必読！

そのグリフィス監督の長編大作が『イントレランス』（16年）。13巻に及ぶこの大作は、①20世紀初期のアメリカを背景にした現代編、②バビロンの没落を描くバビロン編、③キリスト最後の日を描くユダヤ編、④聖パーソロミューの大虐殺を描く中世編の4編から成り立っており、全編が「憎しみと不寛容が時代を通して、愛と慈善に対していかに争い合ったか」というテーマで描かれている。私はこれをDVDで観たが、その壮大さにビックリ！私は中学時代に一人で映画館に通い、1950年代のさまざまな洋画の名作を鑑賞したが、それらの面白さに全く引けを取らないストーリー性と壮大さに感激させられた。そんな「バビロン」については、パンフレットに収録されている町山智浩氏（映画評論家）のレビュー『『バビロン』映画史の生贄たち』に詳しいので、これは必読！

■□サイレント映画の頂点に立つ男は？パーティー風景は？■□

あなたは、チャールズ・チャップリン主演のサイレント映画を観たことがある？『キッド』（21年）や『黄金狂時代』（25年）はサイレント映画の名作として有名だ。また、バスター・キートンを知ってる？このように、チャップリンやキートンは無声映画時代の大スターだが、本作に登場するジャック・コンラッドのモデルはジョン・ギルバートらしい。そして、ジャック・コンラッド（ブラッド・ピット）はチャップリンやキートン以上の、1920年代のサイレント時代の大スターだった。大スターという点はチャップリンもキートンも同じだが、ジャックがチャップリンやキートンと全く違うのは、大のパーティー好きだったこと。もちろん、そんな彼は、酒も女も大好きだ。

本作のパンフレットは880円の豪華版だが、189分の大作でありながら、ストーリーの解説はわずか6行だけ。これは、つまり、本作はそれだけの大作でありながら、ストーリーはごく単純だということだ。他方、私は本作を600円追加してIMAXで観たが、それは大正解だった。なぜなら、それは冒頭約20分で描かれる1920年当初のベルエアー（ハリウッド）での大パーティーのものすごさを、大スクリーンと良質な大音量で楽しむことができたためだ。『イントレランス』もものすごい歴史劇だったが、それから100年以上経た現在のIMAX技術にかなうはずはない。

前述の『映画検定公式テキストブック』は、「歓楽の都ハリウッド」の小見出しで、「ロスコー・アーバックルが1921年9月にサンフランシスコのホテルで開いた乱痴気パーティーで、若手女優ヴァージニア・ラッペが数日後に死亡した。アーバックルはレイプと殺害容疑で告訴され、三回も裁かれ、三回とも無罪となったにもかかわらず、下落した人気は元に戻らなかった。」と書いているが、本作冒頭から約20分間続く乱痴気パーティーはまさにそれと同じ。しかし、その乱痴気騒ぎの中で若い女性が死亡したため、パーティ

一主催者はそれをごまかすべく、象を入場させることで入場者の目を惹きつけ、その間に女の死体を運び出すという暴挙に出たが・・・。

■□■この女の野心とスター性は？この男の野望と誠実さは？■□■

『蒲田行進曲』(82年)で松坂慶子が演じた小夏は、大部屋女優だった。それに対して、単身で堂々とパーティー会場に乗り込み、「私は生まれながらのスター！」と名乗る女ネリー・ラロイ(マーゴット・ロビー)は、大部屋女優でもなければエキストラでもない。要するに、映画界に何のツテもない田舎娘に過ぎなかった。他方、本作導入部で、パーティーのための象運びをしていた青年マニー・トレス(ディエゴ・カルバ)はパーティー会場の入口で、パーティー会場に乗り込んできたネリーと知り合うシークエンスが描かれる。しかし、この時点では、大スターのジャックに比べれば、この2人は、クソみたいなものだ。しかし、酔っ払ったジャックの介抱等で、意外な才能(機転)を発揮したマニーは、ジャックがあればこれ雑用係に使ったことから、運が開けていくことに。このストーリーは、まるで侍になるために、当初、草履取りから織田信長に仕えた猿こと木下藤吉郎の出世ストーリーと瓜ふたつ・・・。

他方、パーティー会場内で若い女が死亡したことをきっかけに、会場内で踊り狂っていたネリーが、“ある仕事”に急遽抜擢されることに。そんな嘘みtainな本当の話が連続していく中で、それまでの価値ゼロだったネリーとマニーの2人が、急遽それぞれの世界で伸し上がっていくことに！

今のような閉塞社会の日本ではこんな想定外の大出世は考えられないが、1920年代後半における、まさにイケイケドンドン、何でもありのハリウッドの映画界では、ネリーのように“映画界で大スターになりたい”という野心さえあれば、また、マニーのように“何がなんでも映画界で働きたい”と願う熱意と誠実ささえあれば、伸し上がりは可能だったようだ。もちろん、そのためには千載一遇のチャンスをつかみ、我がものにする、木下藤吉郎のような才覚も不可欠だが、・・・。

■□■トーキー映画初公開と大恐慌！まさに天国から地獄へ！■□■

前述の『映画検定公式テキストブック』の「ハリウッドで映画製作が始まる」の小見出しの項には、①最初に本格的な映画製作所が設立された1910年代のハリウッドの地価は1エーカーが300～400ドルだった、②木材の値段は安く、大工の労賃もニューヨークの25%から50%は安かった、③天候の荒れることが少ない快適な気候は、1年通して仕事することを可能にし、群集場面用のエキストラは日給2～3ドルで雇えた、④締め屋のプロデューサーなら、バーベキュー・ランチとアマチュアに映画製作にかかわることができたという喜びを与えるだけで群集を集めたものだった、⑤あるプロデューサーは「陽光が降り注いで恰好の照明となり、ニューヨークで撮るよりも3分の1から半分はコストが軽減できる」と語っている、等と書かれている(65頁、66頁)。そして、「アメリカ映画の新しい時代の幕開け」「コメディが大人気に」と続き、「産業としての映画が確

立]「スター誕生」「歓楽の都ハリウッド」と続いていくわけだ。

しかし、その後、「映画にサウンドがついた」(72頁)の項目では、1927年にはじめてヴァイタフォン・システムによるトーキー映画『ジャズ・シンガー』が公開されて大ヒットし、他方では、1929年に第1回アカデミー賞授賞式が行われたが、同年10月24日にはウォール街の株が暴落して大恐慌時代が始まったことが書かれている。さらに、同書は、「第二部 ハリウッド黄金時代」(72頁)で、「スタジオ・システムの精華」「スター監督と大プロデューサー」と続いていくが、本作の主人公の一人、ジャックにとっては、まさにサイレント映画からトーキー映画への転換は大事件。これは今でいうアナログからデジタルへの転換以上の大変化だった。そのため、顔は良くても声が悪い、訛りがある等々のサイレント時代の大スターたちは次々と没落していった。しかし、チャップリンは、はじめて「サウンド版」と呼ばれる劇伴や効果音の伴った作品として『街の灯』(31年)を製作し、『モダン・タイムス』(36年)で部分的なトーキーを用い、『独裁者』(40年)を完全なトーキー映画として製作したから、その変化に対応できた。しかし、ジャックは？

■□■中年男の悪あがきは？新進女優と若き野心家の転身は？■□■

本作は、『ラ・ラ・ランド』(16年)、『シネマ39』(10頁)のデイミアン・チャゼル監督らしく徹底したエンタメ大作だが、同時に、本作中盤からは、バビロン＝ハリウッドの1920年代～30年代を華々しく生き抜いた3人の主人公がトコトン苦しまむ人生模様が描かれていく。張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『活きる』(94年)、『シネマ5』(111頁)は、1940年以降の中国現代史の中を、「人生はあざなえる縄のごとし」の諺どおり、ジェットコースターのような浮き沈みを体験しながら、たくましく生き抜いた夫婦を描いた名作だったが、さて、本作に見る3人の人生模様は？

「2022大阪・中国映画週間」で観た中国映画『トゥ・クル・トゥ・キル』(22年)では、ミュージカル『雨に唄えば』(83年)が半分パクリ気味(?)に使われていたのでビックリしたが、本作にもその名シーンが効果的に使われているのでそれに注目！もっとも、本作中盤に見るそれは、あの映画のあの有名なシーンではなく、それまでサイレント映画の中で生きてきた俳優たちが、時代に合わせて否応なく大合唱させられているもの。これは、彼らには屈辱のはずだ。そして、その中にジャックも入らされていたから、彼の心境やいかに？

他方、ネリーは若いだけに、サイレントからトーキーへの変化にもついていけたらしい。トーキーになると、監督や俳優は音響係や録音係(の技術)にも気を遣わなければならぬから大変。俳優の立ち位置がずれたり、変な音を出したりすると即撮り直しになるから、テイク1、テイク2、テイク3と同じシーンを何度も撮り直さざるを得ないことに。ハリウッド最初の専業女性監督ドロシー・アズナーをモデルにした女性監督ルース・アドラー(オリヴィア・ハミルトン)の演出の下、ネリーはそんな試練に耐えていたから立派な

ものだ。また、映画製作を夢みるメキシコ出身の若き野心家マニーにとっては、サイレントからトーキーへの劇的変化は、自分を生かす大きなチャンス。なぜなら、それまでの組織やシステムそして人的構成が一転したのだから、そこに新たな映画製作のビジネスチャンスが生まれるからだ。すると、多くの才能を持った野心家のマニーなら、新たな映画製作会社を立ち上げ、斬新なトーキー映画製作に邁進すれば、成功間違いなし！

■□■準主役を務める2人の個性も面白い！■□■

本作は、3人の主人公のほか、準主役として、「東洋のエメラルド」と評される女性歌手レディ・フェイ・ジュ（リー・ジュン・リー）と、映画がトーキーになり一躍スターの座に踊り出たトランペットの名手シドニー・パーマー（ジョー・ヴァン・アデボ）が登場するので、この2人の生きざまにも注目したい。現在の世界の注目はウクライナ戦争だが、他方で今後の世界秩序を規定する最大のポイントは米中対立。第2次世界大戦後のそれは米ソ冷戦だったが、急速に経済力と軍事力を強め、米国に次ぐ世界第2の実力を備えた中国は、2035年には米国に追いつき、2049年には米国を追い越すという明確な目標を持って着々と・・・。

しかし、今から約100年前の1920年代のハリウッドには、“東洋のエメラルド”と評される中国系の興味深い女性歌手レディ・フェイ・ジュがなんとも切ない歌声で人気を呼んでいたから、それに注目！サイレント映画とハリウッドの隆盛の中で栄華を極めた大スター、ジャックに対して、中国系のレディ・フェイ・ジュは自分の立場をしっかりとわきまえていたようだから、時代が大きく変わる中でも、その立場は普遍・・・？

他方、黒人のトランペッターだったシドニー・パーマーは、無声映画の全盛期には刺身のツマだったが、トーキー時代に突入すると、俄然注目！そのトランペットの音はトーキー映画を盛り上げるのに絶好の小道具になったから、シドニー・パーマーも黒人ながら一躍スターの座に踊り出ること。しかし、ネリーが主演する映画で、音響係との連携に苦労したのと同じように、シドニー・パーマーはある日、照明係との連携で“黒塗り”を強要されたから、アレレ、アレレ。シドニー・パーマーは自分が黒人だという前提で、また人種差別があることを前提で、トランペッターとしての実力を“売り”にしてきたが、「照明を当てると顔色が白くになってしまうので、黒人の肌の上にさらに黒塗りしろ」と言われると・・・？スターの座を維持するためには、そんな屈辱的な命令にも耐えなければならぬ・・・。

■□■三者三様の主人公の人生の選択は？その明暗は？■□■

サイレント時代の大スターだったチャップリンは、トーキーへの変化にも何とか対応できたらしい。そのため、『チャップリンの独裁者』（60年）という“映画史上の最高峰”と賞賛される“命をかけた傑作”を生み出した。しかし、東西冷戦が強まる中、アメリカ国内の共産主義シンパを排除しようとした“赤狩り”が始まると、チャップリンは共産主義者であると危険視され、1952年には事実上アメリカから追放された。そのため、1

972年に第44回アカデミー名誉賞を受賞するまで、20年間アメリカの地を踏むことはできなかった。それに対して、ジャックはサイレント時代はチャップリン以上の人気者だったが、『雨に唄えば』の大合唱のシークエンスに象徴されるように、トーキーには馴染めなかったらしい。そのため彼の人気は少しずつ落ち目となり、遂にある日・・・。

他方、アメリカ初の女性監督に見出されて主演の座を射止めたネリーは、若いだけにトーキーへの変化に順応していたが、“乱痴気パーティー大好き人間”という本質は変わらなかったらしい。そして、パーティーと酒だけならまだしも、そこにマリファナ等の薬物が絡んでくると、いかに“歓楽の都ハリウッド”といえどもヤバい。映画出演の傍らネリーが見せる破天荒な行動の数々はあれこれの問題点を生んだうえ、ある日ついに・・・。ジャックは、「太く短く！」という人生哲学をもっていたことが明らかだが、ネリーは、「私は生まれながらの大スター」という思い込み（のみ）で、たまたまその持っていた才能を発揮する場所が与えられただけ。したがって、それを維持していく才覚がなければ、その崩壊は目に見えているが、案の定・・・。

それに対して、マニーは若いけれども、思料深く我慢強いから、日本で言えば、信長タイプのジャックはある時期に破滅してしまったが、百姓から侍になり、関白まで登りつめた秀吉タイプの(?)マニーは、ハリウッドがどのように変わっていかうとも、それに対応して生き残ることができたらしい。しかし、本作には、第2次世界大戦を終えた後のハリウッドを妻子を連れたマニーが訪れる姿が登場するので、それに注目！

2023（令和5）年2月16日記